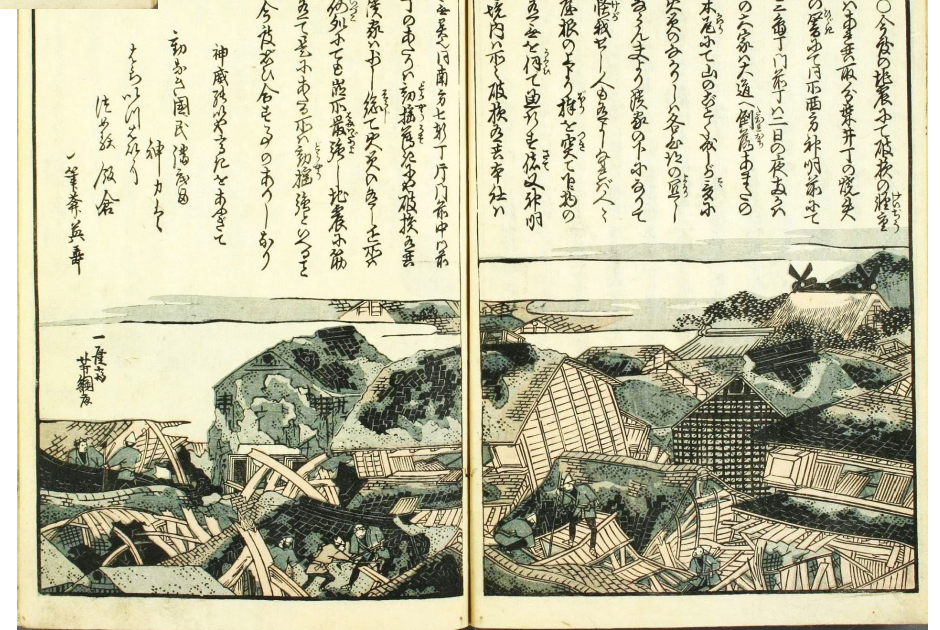
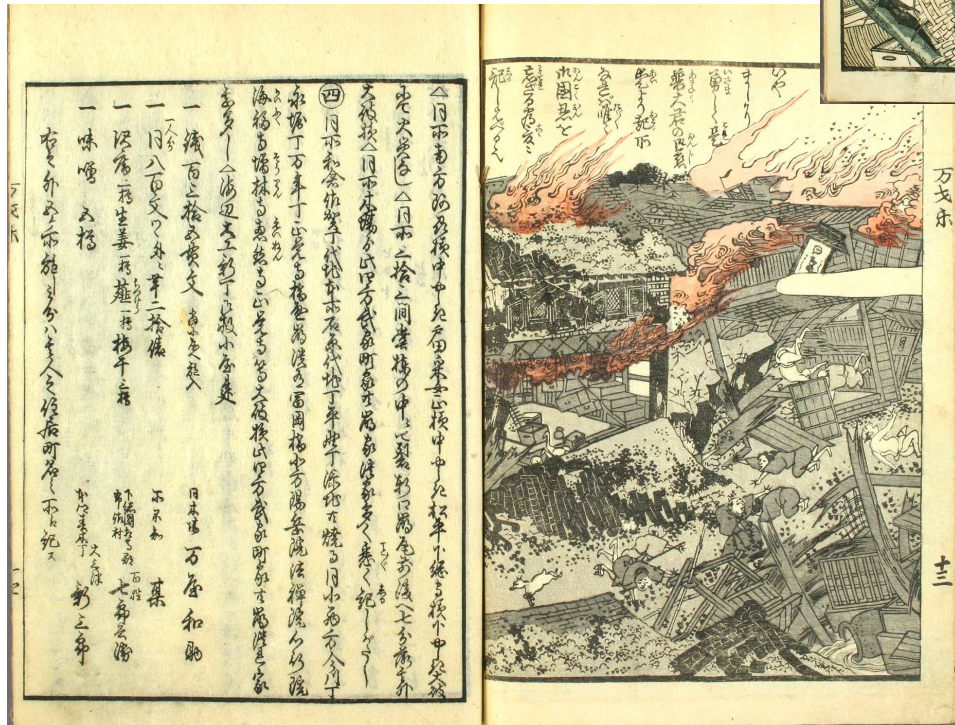
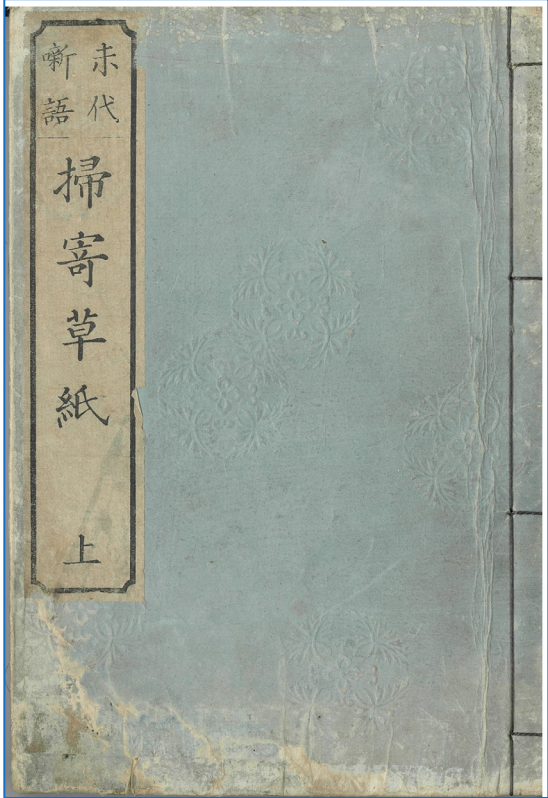


安政2（1855）年10月2日の夜、マグニチュード6.9と推定される激しい揺れが江戸およびその近郊を襲いました。この大地震によって、江戸だけでも7千～1万人の死者を出しました。地震発生翌年に発行された『安政見聞誌』は、江戸各地の被害状況や風説をまとめたルポルタージュともいえるものです。











十方世界三佛集  
菩提手向三股對善

冥途旅蓮其臺道連

通計四十八個

うへびの流るる病小作...  
あつこりの病...  
はつたつと...  
悔むもこれ...  
ふまの...  
悔米庵

悔川柳  
昔毎小月...  
悔得無

悔種貞  
社風...  
つろ...  
悔櫻亭

悔小後  
悔小後  
那風...  
悔年九

悔二葉  
五の...  
高川...  
悔文二

悔龜年  
悔龜年  
悔龜年

紀ある  
九車堂主人

曲彈 鶴澤文二

俳諧	過日庵祖郷	木偶	吉田東九郎
書家	市川未庵	俳優	松本虎六郎
名妓	稲本樓小箱	落語	上方文六
狂吟	緑亭川柳	家元	清元延壽太夫
墨画	一立齋廣重	俳優	尾上格翁
狂歌	熱栗園千壽	勇	万力岩藏
著述	柳下真種貞	鎌	竹本権吾太夫
軍談	一竜齋貞山	墨家	櫻窓三拙
俳諧	惺庵西馬	活花	貞植齋
書家	大竹蔣塘	力士	寶川石五郎
墨家	英一笑	俠客	仁組長左門
狂歌	六朵園二葉	三系	杵屋六左門
戯作	樂亭西馬	三弦	清元市造
落語	鈴舎馬風	戯作	五遍舎半九
俳優	小六	割間	都与佐太夫
音曲	竹本兒平	太夫	音曲
墨工	立川國郷	三弦	岸澤文字八
音曲	天狗連魚辰	女匠	都千枝
音曲	常磐津須奈	のど	清元深太夫
俳諧	福芝齋得燕	はし	清元鳴海太
墨名	石上龜年	二糸	清元秀太夫
美音	常磐津李義	文學	土肥南海
妙音	常磐津李栄	書法	渡邊源藏
清音	常磐津小若	著作	滝澤琴童

山東京山録



鹿兒島藩新政府大都督  
西郷隆盛本營

依ありて我地友軍の  
焼くはるる平樹の煙  
いまもあつたるおれもあ  
く明けあんまりおれもあ  
まはるは城の  
城をこまひこと輝を  
さるお友軍のいそぐ  
城軍の陣のありくるを  
ありかして伏せり侍る地を人の  
地面を城のあつたあつたの地を人の  
小まはるは城の  
橋本の板の自給の建れを  
又お軍の八門丸のありて城を城を  
去るあり二里ありて城を城を  
園をありて城を城を  
城を城を城を城を

報せ  
おれもあ  
ありと  
ありと

鹿兒島縣

省の  
五  
錦

首兵城

西郷隆盛  
明治五年五月  
編輯  
鹿兒島藩新政府大都督  
西郷隆盛  
鹿兒島藩新政府大都督  
鹿兒島藩新政府大都督



有のそのまゝ五号





嘉永七年庚申八月六日

行筆 三十二歳

八代目

市川團十郎

猿白院成清日田信士



嘉永七年八月六日  
 猿白院の主人成清の  
 幼多しと云院の主人成清の

嘉永七甲寅年八月六日浪花三而没ス

猿白院成清日田信士

八代目

市川團十郎

行年三十二才



祥世

志波の暮れ

樹乃かひをよみ

かゝぬ縁の

門出とる身

若の尾

三井

根をくちり

かきけり

浮気

## ◇服部幸雄『市川團十郎・代々』より抜粋

## 大坂での自殺

嘉永七年（一八五四）六月の末、八代目は土用休みを利用して在坂中の父海老蔵を訪ねようと思いついて江戸をたつた。途中名古屋で興行していた父と一座し、閏七月一日を初日として「与話情浮名横櫛」の与三郎、「曾我对面」の十郎などで好評を得、二十三日に打ち上げた。そこから父とともに大坂に赴き、二十八日に道頓堀中の芝居へはなやかに船乗り込みをした。ここでは市川白猿の芸名で、当たり役の「児雷也」と「切られ与三」を出す予定で、初日を待つばかりとなっていた。しかしその初日八月六日の朝、島の内御前町の旅館植久の一室で自殺してしまった。三十二歳だった。その原因については、彼の極端に神経質な性格に起因するというもの、**七代目の愛妾ためとの確執によるもの**、夏の休みに江戸を離れて大坂に出演することの不義理に悩んだとするものなど、さまざまな説が語られているが、ほんとうのことは誰にもわからない。法名**篤誉浄庭実忍信士**といい、**大坂の一心寺と江戸の常照院とに葬られた。**

八代目も団栗・二升・夜雨庵の俳名で俳諧をよくし、書画にもすぐれた才能を持っていた。短い生涯だったが、数多くのみごとな遺筆を残した。

## 八代目フアンの熱狂ぶり

格別の美貌で、生涯独身で通した八代目の人気は、自殺の後もいっこうに衰えず、いつまでもその早すぎる死が惜しまれた。そのことは**三百種を超える膨大な死絵が出版**されたことによってもわかる。このような例は他に一人もない。（略）死絵の中に、団十郎を死に追いやったのは後の九代目の母親である七代目の愛妾ための陰謀と解釈し、ためという女性を悪役に仕立てあげたものもある。当時そんな噂も市中に飛び交っていたのであろう。

死の直後には何種類もの読み物が出版された。『八代目市川團十郎一代狂言記』『露時雨八代愁傷』『明烏夢物語』などである。こういつた書物が出版されたことは、それだけ多くの読者があったことを物語ってあますところがない。



課題



